

編集にあたって 姜尚中

巻頭言 三浦 徹

凡例

第1章

日本における古典的国制・文化の形成

大津 透

はじめに

藤原道長 (九六六～一〇二七)

その生涯／政治と制度／文化史上の役割

桓武天皇 (七三七～八〇六)

藤原師輔 (九〇八～九六〇)

003

034 029

源信 (九四二～一〇二七)

紫式部 (生没年不詳(九七〇～九七三頃の生まれか))

その他の人物

坂上田村麻呂／円仁／円珍／張宝高／藤原良房／藤原基経／

菅原道真／藤原忠平／斎然／藤原公任／藤原行成／

清少納言／藤原定子／藤原彰子(上東門院)／後三条天皇

041 039 036

第2章

院政と武士政権

——王朝の時代から武家の時代へ

大隅和雄

はじめに

白河院 (一〇五三～一二二九)

天皇と摂関家との確執／院政の開始／院政と武士／勅撰集の編纂／法勝寺の造営／熊野参詣

慈円 (一一五五～一二二五)

生い立ち／比叡山延暦寺／天台座主／九条家の後見／『愚管抄』の執筆／『愚管抄』の攷筆と追記

053

056

065

後白河院（一二二七～九二）

平清盛（一一一八～八二）

源頼朝（一二四七～九九）

その他の人物

鳥羽院／崇徳天皇／藤原頼長／藤原通憲／平将門／藤原純友

076 078 080 083

### 第3章

## 李子淵から李資謙へ

——李子淵系仁州李氏とその時代

豊島悠果

はじめに

089

李子淵（一〇〇三～六一）

093

李子淵の家系／李子淵の官歴と婚姻関係／李子淵の事績／文宗朝の李子淵家

思肅太后李氏（生没年不詳）

106

摂政を行ったはじめての貴族出身女性／宣宗の外戚家門としての李子淵系仁州李氏と仁睿順徳太后／宣宗朝の政界と外戚／思肅太后李氏の支持勢力／李資義の乱／思肅太后の摂政に対する

評価／肅宗朝の李子淵系仁州李氏

李資謙（？～一一二六）

116

李資謙の出世と次女の納妃／睿宗の政治運営と李資謙・韓安仁／王の外祖父としての礼遇／韓安仁派の肅清／高麗における外戚貴族勢力の絶頂期／「知軍国事」の自称と仁宗との対立／李資謙の乱／政権争いと武力／李資謙の専横時期における官僚たちの政治的意見の表示／李子淵系仁州李氏その後／李子淵から李資謙へ——外戚家門としての台頭と限界 および藤原氏との比較

金富軾（一〇七五～一一五一）

136

その他の人物

金殷傳／王可道／韓祚／王煦／韓安仁／金仁存／李公寿／拓俊京／李仁老

138

### 第4章

## チョーラ朝とバクティ

石川 寛

はじめに

145

ラージャラージャ一世（在位九八五～一〇一四）

149

ラージャラージャ一世即位まで／ラージャラージャ一世即位／東南アジアとの関係／ラージャラージャの水利事業／ラージャラージャーエーシユヴァアラ寺院の竣工／ラージャラージャーエーシユヴァアラ寺院への寄進／寺院の壁の碑文／壁画の制作／バクティの聖者スンダラル／壁画をめぐる確執

### ラージエーンドラ一世 (在位一〇二二～四四)

事績／北インド遠征／最盛期以降

### ヴィクラマーディティヤ六世 (在位一〇七六～一二二七)

兄王との対立／ヴィクラマーディティヤ即位

### シエンビヤン・マーデーヴィ (マハーデーヴィー) (?～一〇〇一頃)

ラーマーヌジャ (生没年不詳)

ナーヤナール

アールワール

### マニグラーム (マニグラーム)

五百人組

その他の人物

クロットトウンガ一世／ナーナーデーシ／テルグ・チヨード／  
ヴィジャヤバーフ一世／クリシュナ三世／タイラ二世／ホイサラ朝／  
カーカティヤ朝／ジャターヴァアルマン・スンダラパーンディヤ一世／

194

192

191

189

186

184

183

178

170

## 第5章

# 東南アジアのインド化最盛期と 新しい原理に基づく国家の台頭

青山 亭  
松浦 史明  
伊東 利勝  
上田 新也

はじめに

205

大陸部 (アンコールなど)

スーリヤヴァアルマン二世 (在位一二二三頃～五〇頃)

210

ジャヤヴァアルマン七世 (在位一二八一～一二二八頃)

213

アンコール朝「最後の大王」／スーリヤヴァアルマン二世死後の混乱／チャンパーによる王都侵攻  
とアンコール朝の再統一／広がる版図／域内統治に奔走／宗教を用いた王権強化とその限界

アノーヤター(二〇二四?七七?)

220

島嶼部(ジャワなど)

アイルランガ(二〇〇二頃～五二頃)

223

割 ダルマワンシャ王の宮廷文化／アイルランガ王の統一事業／アイルランガ王の内政／王国の分

ジャヤバヤ(在位一二三五頃～五七頃)

229

その他の人物

232

李公蘊／チャンシッター／ジャヤ・インドラヴァアルマン四世／

スーリヤヴァアルマン(ヴィデイヤーナンダナ)／ケン・アンロック

## 第6章

# 中国史学の構築

櫻井智美

はじめに

237

司馬光(二〇一九～八六)

240

一、北宋をめぐる国際環境と司馬光の政治活動 宋による統一から澶淵の盟まで／西夏の建国と司馬光の出仕／司馬氏の進士及第／慶暦の治とその後の飛躍／唐宋八大家と司馬光／王安石の  
新法とそれへの反論  
二、『資治通鑑』の作者としての司馬光 通史作成の開始／神宗による『資治通鑑』命名／洛陽での生活と『資治通鑑』の進呈／編年体史書『資治通鑑』成立の背景  
三、司馬光が残したもの 『資治通鑑』の後継者／『家範』『涑水紀聞』と朱子学／『新唐書』『新五代史』の先に／通史への志向と『中国史』の確立／新法の完全停止とその後

欧陽脩(二〇〇七～七二)

267

神宗(二〇四八～八五)

270

劉恕(二〇三二～七八)

273

范祖禹(二〇四一～九八)

274

胡三省(一一三〇～一三〇二)

276

その他の人物

279

司馬池／聶氏／司馬旦／仁宗／英宗／哲宗／宣仁皇后高氏／李元昊／

遼太宗耶律德光／龐籍／范仲淹／韓琦／文彦博／呂公著／曾鞏／

王安石／蘇軾／劉敞／劉安世／李燾／朱熹(朱子)／袁樞／梁啓超

開封の光と影  
——風流天子徽宗の治世と都市文化

久保田和男

はじめに

297

## 徽宗（一〇八二～一一三五）

300

- 一、「建中靖国」——徽宗の即位
- 二、「崇寧」年間——紹述・祥瑞・彗星 紹述主義／祥瑞と絵画／巨大彗星の出現と「清明上河図」
- 三、「政和」年間——道君皇帝として
- 四、東京開封府の変貌 軍營の廃止と賜第／艮岳（万歳山）の造営
- 五、「民とともに楽しむ」——郊祀と上元観灯による都城繁華の演出 南郊へ向かう御街と北郊へ向かう東華門街／宣徳門と景龍門で盛世を実感する徽宗
- 六、「宣和」の異変 方臘の乱／燕雲の回復
- 七、靖康の変と「二帝北巡」 第一次開封籠城戦——靖康元年一月／第二次開封籠城戦——靖康元年閏十一月
- 八、死後の徽宗

## 高宗（一一一三～一一八七）

337

## 孟元老（生没年不詳）

342

## 張商英（一一〇三～一一二二）

346

## 足利義満（一三五八～一四〇八）

348

その他の人物

蘇軾／章惇／蔡京／林靈素／蔡條／茂徳帝姫／宋江／童貫／元祐皇后

351

## 北宋滅亡の混乱を生き抜いた女性詩人

松尾肇子

はじめに

361

## 李清照（一〇八四？～一一五五？）

365

- 一、開封での日々（一〇八四～一一〇七） 李清照の生い立ち／開封での結婚生活
- 二、山東での日々（一一〇七～一二七） 青州で『金石録』完成を目指す／李清照の『詞論』／趙明誠の出世
- 三、江南へ（一二二七～二九） 南渡／趙明誠との別れ
- 四、高宗を追って（一二二九～三二） 困難に襲われて／海へ／戦乱に疲れて
- 五、浙江で（一二三二～五五） 再婚・離婚／望郷／一人生きる

## 李格非（一〇四五？～一一〇八？）

394

## 趙挺之（一〇四〇～一一〇七）

396

趙明誠（二〇八一～一二二九）  
張汝舟（生没年不詳）  
朱淑真（二〇七九頃～一二三三頃）

その他の人物

王珪／王拱辰／趙思誠／韓肖胄／綦崇礼／薛濤／魚玄機／柳如是／  
顧太清／呂碧城／温庭筠／李煜／柳永／蘇軾／晏幾道／賀鑄／  
秦觀／黄庭堅／周邦彦／辛棄疾／姜夔／呉文英／張炎

404 402 400 398

## 第9章

### 近世東アジア思想界の巨人

——朱子学の大成者

小島 毅

はじめに

421

朱熹（朱子）（一一三〇～一二〇〇）

425

生涯／道統説／理気・心性／経書解釈／社会政策

王安石（二〇二一～八六）

437

蘇軾（二〇三六～一一〇一）  
程頤（二〇三三～一一〇七）  
陸九淵（二一三九～九二）  
真徳秀（二一七八～二三三五）

その他の人物

胡瑗／歐陽脩／邵雍／周惇頤／司馬光／張載／程頤／楊時／  
張九成／胡宏／史浩／張栻／蔡元定／呂祖謙／楊簡／陳亮／  
葉適／黄榦／陳淳／王忠麟／文天祥／呉澄／宋濂

454 452 451 447 443

## 第10章

### 多民族を包摂するイスラーム

——軍人・ウラマー・スーフィー

三浦 徹

はじめに

467

ヌールッディーン（二一八七～七四）

476

ザンギー朝の樹立／群雄割拠のシリア／南進とシリア統一／エジプトの政情／ザンギー朝国家  
の統合／伝記集の評価と人物像

## サラデイン (二一三七／八～九三)

アイユーブ朝の樹立／十字軍へのジハード／十字軍時代の戦争と商人／サラデインの事業と評判／アイユーブ朝という連合王国／アイユーブ朝の建設事業

487

## バイバルス一世 (二二三〇頃～七七)

マムルーク朝の創設／スルターンとして／事績と美点／『バイバルス物語』

499

## マリク・シャー (二〇五五～九二)

## ニザームルムルク (二〇一八～二〇一九／二〇～九二)

## ガザリーリー (二〇五八～一一二)

その他の人物

トウグリル・ベク／アルプ・アルスラン／ナースイル・リ・デイーニツラー／  
マールワルデイー／スフラワルデイー／イブン・ジャウズイー／シャーワル／  
シールクーフ／ウサーマ・ブン・ムンキズ／アーデイル／カーミル／ムアツザム／  
イブン・カラーニスィー／イブン・アサーキル／カーデイー・ファードイル／  
イブン・マイムーン(マイモニデス)／イブン・ジュバイル／イブン・クダーマ／  
イブン・アスィール／サリーフ・アイユーブ／シャジャラルドウツル／クトウズ

514

511

509

507

## 第11章

# 崔忠猷と高麗武臣政権の百年

矢木 毅

はじめに

531

## 崔忠猷 (二一四九～二二一九)

534

一、武臣の乱 武臣政権の成立／李高と李義方／武臣たちの争い／column 各地の民衆反乱  
二、崔忠猷の専権 弥陀山荘の闇討ち／崔忠猷の出自／封事十条／国王の廃立／弟・忠粹との確執／万積の乱／都房の設置／人事権の掌握／宰相への道のり／孔雀・牡丹の問い／恩門相国／甥・朴晋材を追放／教定別監 宮中での遭難／動乱の予感／契丹の入寇／軍閥政治家の本性／崔忠猷の死  
三、崔氏政権のその後 崔怡(？～二二四九)／政房の設置／都房と書房／晋陽府／教定都監／夜別抄と馬別抄／モンゴル軍の侵攻／江華島への遷都／崔怡と禪宗寺院／中世の仏教寺院／大蔵経の再雕／崔沆(二〇九～五七)／大蔵経の完成／崔瑄(？～二二五八)／政婦王室  
四、武臣政権の崩壊 金俊(？～二二六八)／宮中の策謀／林衍(？～二二七〇)／三別抄の反乱  
五、高麗武臣政権の遺産 崔怡と忠烈王／権力機構の継承／新たな時代への模索／朝鮮史における「文」と「武」／それぞれの「中世」と「近世」／そのころ文臣たちは

## 文克謙 (二二二三～八九)

587

## 李仁老 (二一五二～二二一〇)

588

琴儀 (二五三～二三〇)

李奎報 (二六八～二四一)

崔滋 (二八八～二六〇)

その他の人物

毅宗／明宗／神宗／熙宗／康宗／高宗／元宗／

鄭仲夫／李高／李義方／宋有仁／慶大升／李義旼

596 594 592 590

執筆者一覧

写真提供・図版出典

### 凡例

- ・本書の構成は、章ごとにまず中心となる人物について述べ、次いで当該人物を取り巻く重要な人物について、さらに関連する人物について、項目を立てて述べている。ただし、例外的にこの構成を採らない章もある。
- ・本文中、その章で項目を立てた人物名等の初出に「▼」を付した。
- ・漢字表記については、原則として常用漢字を用いた。
- ・人名および地名等については、平凡社の『世界大百科事典』、『エリア事典』シリーズ、岩波書店の『岩波イスラーム辞典』、『古代オリエント事典』、その他の各種事典類を参照しつつ適宜検討し、採用した。
- ・ふりがなについては例外を除き、日本と中国の人名および地名等については日本語の読みによるひらがな表記、その他の漢字圏の人名および地名等については現地音によるカタカナ表記で付した。
- ・外国語文献の日本語訳については、特に断りのないものは執筆者による。また、日本の古典籍等については執筆者により適宜読みやすく整理した場合がある。
- ・引用文中の執筆者の補注については原則として「」を使用した。
- ・年代は原則として西暦(新暦)表記とした。月日については、西暦採用以前の東アジア地域では旧暦のままとした章もあるが、それ以外の地域については、特に断りのないものは西暦表記とした。
- ・イスラーム圏におけるヒジュラ暦等、西暦への換算にあたって二年にまたがる場合、原則として下一桁を「/」でつなぎ表記した(「一四〇〇/一年」等)。
- ・人物の満年齢と数え年については執筆者の表記を尊重した。